

光村ポケット

中学校 道徳

vol.4

対話を深めよう！

- 子どもが本気で考えたくなる！
対話のキホン （及川仁美先生）
- 対話が生まれるクラスづくり
（赤坂真二先生）



光村図書



LINE公式アカウント友だち募集中！
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



【教授用資料】 本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。



子どもが本気で考えたくなる！

対話のキホン



意図を明確にする

対話をさせる際は、何のために行うのか、意図を明確にしてから効果的な方法を選ぶようにしています。あくまでも生徒が自分の考えを深めたり、他者の考えに気づいたりするための活動であることを忘れないようにします。

こんな方法を使っています！

ペアトーク グループトーク

考えをアウトプットする第一段階として、活用しています。全体では発言が難しい生徒でも、少人数なら発言できることがあります。グループの人数が多いと、傍観者が出やすいため、3～4人で組ませることが多いです。また、座席で分ける以外にも、問いに対する解答が同じ生徒どうして組ませて、その後の全体の話し合いにつなげることもあります。

思考ツール 心情表現ツール アンケートツール

全体の状況を把握したり、さらなる発言の後押しにしたりする際に、活用しています。アナログの形でも、ICTを使用しても、どちらでもかまいません。ツールを活用して全員の考えの立ち位置がわかるようにしたり、アンケート機能で意見集約したものをリアルタイムでグラフ化して見せたりしています。



自分事として考える「しかけ」を用意する

道徳科の授業を行う前の準備を大切にしています。形だけ対話を行っても、興味・関心がもてなければ、大人でも考えることは難しいです。中学生は特に、議題に必然性があるかどうか対話の質に直結します。ですので、設定した授業のねらいや議題に必然性があるかを吟味し、生徒が自然と興味・関心がもてるような「しかけ」を用意しています。

こんな「しかけ」を用意しました！

興味・関心を 高める「しかけ」 中学2年 「遠く離れた人に 会いたい」の場合

教材研究の際、オリィ研究所の「人類の孤独を解消する」という理念に魅力を感じました。そこで導入の際、理念の「孤独」をあえて隠し、生徒に当てはまりそうな言葉を考えさせました。「孤独」が入ることを伝え、「どういう意味？」と首をひねる生徒たち。ここからさらに、「そもそも孤独とは？」と問います。教材を読んだ後は、吉藤さんが考える「孤独の解消」のための解決策「自分がやるべき役割があること」を受けて、生徒はOriHimeと他のロボットの違いについて考え始めました。

生活や生き方と リンクした「しかけ」 中学2年 「ジコチュウ」 の場合

初めに、行事（文化祭など）の際の具体的な取り組みを想起させ、「取り組みの中で、うまくいかなかったことは？」と問います。「協力する難しさ」について発言する生徒が多かったので、その困った状況を共有した後、「わかり合うには何が必要なのだろう？」と投げかけ、自分の悩みを主人公の「私」と重ねながら考えさせるようにしました。

「これからの時代、対話が重要だ」と言われますが、ただ話し合いをさせるだけでは、形だけの活動になってしまいます。道徳科の授業において、意見を交流しながら、異なる価値観の存在に気づいたり、向き合ったりして、そこから新しい考えを生み出すためには、どうすればよいのでしょうか。岩手県盛岡市立厨川中学校指導教諭・及川仁美先生にお話を伺いました。



日頃から考える「土台」を育てる

今の生徒たちは、インターネット上の検索エンジンやまとめ・切り抜きのコンテンツなどを通して、すぐに答えが示されることに慣れているため、じっくり考える経験が不足していると感じます。将来の予測が困難な時代だからこそ、考える経験を通して、自分自身を深く知り、他者とともに協働して生きる力を育むことが大切です。そのためには、クリティカル・シンキング(批判的思考)や自己と社会とのつながりを日頃から意識することが必要だと考えています。

考える「土台」を育てるために！

クリティカル・ シンキング (批判的思考)

対話の力、特にクリティカル・シンキング（批判的思考）の力を高めるために、授業での対話の質にこだわっています。まず、クリティカル・シンキングは、相手の意見の「否定」ではなく、相手を尊重してしっかりと意見を聞き、受け止めた意見と向き合って、自分の価値観を適切に示したり、他者と共有できる部分を見つけたりすることだ、と生徒にきちんと伝えます。どんな生徒でも安心して発言できる環境づくりのためにも、丁寧に理解させたいポイントです。
そのうえで、話し合いが安易にまとまりそうな場面では「本当にみんな同じかな？ 理由をもう少し丁寧に比べてみようか。」「AかBかの議論になっているけれど、他の意見の人はいないかな？」など揺さぶるような声かけをし、より多面的・多角的な視点から考えることができるように促しています。

自己や社会との つながりを 意識する

教材によっては、生徒から出る意見や考えが「正しいけれどきれいな事」に終始することがあります。そんなときには、話題を日常生活や他教科の学習とつなげたり、社会の一員として考え続けるための視点をもたせたりしています。例えば、中学2年「境界線を溶かすチョコレート」では、社会科や家庭科で扱う貿易に関する内容や児童労働の問題などと関連づけ、自分たちの購買行動が、社会にどのような影響をもたらすか、具体的に考えさせるなどすることで、リアルな学びになるように心がけています。

①と②は、特に道徳科の授業の際に意識していることです。
③は、道徳科だけでなく、他教科の学習の際にも心がけ、子どもたちがより深く、より真剣に語り合えるような力をつけることを意識しています。

岩手県盛岡市立厨川中学校 指導教諭 **及川仁美**



対話が生まれるクラスづくり

上越教育大学教授
あかさかしんじ
赤坂真二



教育活動の基盤は学級経営といわれます。なぜなら、授業はもちろん、生徒指導、特別支援教育などの目的を達成するための環境整備が、学級経営だからです。学級経営という営みは、複雑で多岐に渡るためにどこを目ざしたらいいかがわかりにくいものですが、その目標のひとつに豊かな文化づくりが挙げられます。では、現代の学級では、どんな文化が大事でしょうか。これもいろいろなものがあると思いますが、学級が子どもたちの居場所であることを考えると、「自分らしくいられること」、つまり、**言いたいことが言えて、やりたいことがやれる雰囲気**のようなものが共有されるとよいのではないのでしょうか。

しかし、他者と共に過ごす中で自分らしくいることはそうたやすいことではありません。**そこで必要なのが、「対話」です。**対話は互いを理解し、違いがあれば折り合いをつけ、互いの自由を認めるためには不可欠な営みです。「対話」の必要性については、近年あちこちで言われるようになりましたから、みなさんのクラスでもさまざまな取り組みがなされていることでしょう。しかし、私たち大人も互いの主張に折り合いをつけることが難しいように、子どもにとっても簡単なことではありません。

対話に必要なのは互いの対等性です。上下関係のあるところでは対話は起こりにくいのです。対話をするためには、交代で話すなどの配慮が必要です。**発話量の均等性が、互いの対等性につながります。**また、対話をするには自分のこだわりや感情をいったん棚上げして、**理性で相手やその主張に向き合うことが必要です。**これには少し練習が必要な場合もあるでしょう。クラスで子どもどうしの対話を実現するには、教師がまず対話の大切さを子どもに伝え、理解を得たうえで、その機会を確保することが大事です。

しかし、いきなり対話が上手にできるわけではないでしょうから、**まずはおしゃべりから始めてみるのがいいでしょう。**問いに対して、まずおしゃべりしてから自分の考えをまとめたり、その逆で自分の考えをある程度決めてから、おしゃべりしたりするような機会を授業のなかで設けるなどするといったのではないのでしょうか。おしゃべりには癒やしの効果もありますから、ちょっと疲れの見えるクラスには、子どもたちが元気になるきっかけになることでしょう。



光村図書

教授用資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)
イラスト 野本雄一郎
発行 2025年10月

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

